

石川県白山自然保護センター普及誌

はくさん

第30巻 第3号



獅子吼高原のスカイスポーツ

白山麓の入口、鶴来町の東に位置する^{しりたか}後高山（標高649m）一帯は^{しししく}獅子吼高原と呼ばれ、獅子吼・手取県立自然公園に指定されています。眼下の手取川扇状地から日本海にかけての眺望はすばらしく、春から秋には遠足やハイキングなどにも利用されます。昭和34年に県内初の本格的スキー場が開設されました。また、そそり立つ地形と平野からの風が適しているため、昭和53年頃からはハングライダー愛好者による飛行が始まりました。昭和56年にはスカイスポーツ基地として、離着陸施設等の整備が開始されました。現在では全国屈指のスカイスポーツのメッカとして、年間4,500人近くが大空の散歩を楽しんでいます。〈写真：鶴来町商工観光課〉

（野崎 英吉）

白山で新記録のコウモリ2種

山本 輝正

昨年2002年の夏、白山でコウモリ類の調査を行いました。この際、2科7種のコウモリ類が捕獲できましたが、この中にこれまで石川県では確認されていなかった2種のコウモリが含まれていました。今回捕獲できたこの2種のコウモリと石川県のコウモリ相についてお話しします。

新記録のコウモリ

コウモリの調査をした場所は、吉野谷村中宮温泉周辺（三ツ又発電所、白山スーパー林道含む）、尾口村深瀬周辺、白峰村市ノ瀬周辺です（図1）。そして新しく確認されたのはモリアブラコウモリとノレンコウモリです。

モリアブラコウモリ（写真1）は、隣の岐阜県では1991年に尾上郷という白山地域の一角で確認されていました。このため石川県側でも生息が予想されていましたが、今回やっとその生息が確認できました。このコウモリは、町中の人家などに棲んでいるアブラコウモリ（イエコウモリとも言う）の近縁種です。外部形態は非常によく似ていて、ごく一部が違うだけです。しかし、アブラコウモリは町に棲むコウモリであるのに対して、モリアブラコウモリは自然林（原生林）に棲むコウモリなのです。森に棲むアブラコウモリと言うことから名前が付けられたようです。頭胴長（鼻の先端から尾の付け根までの長さ）が、43～53mmの小型のコウモリです。全国的に見てもモリアブラコウモリが確認されている生息場所は数少なく、その生態についても分かっていないのが実情です。今回捕獲された個体は、授乳中の個体でした。このことから、石川県内で繁殖をしていること



写真1 モリアブラコウモリ



調査地域 xは調査地を示す

は確かなようです。

次にノレンコウモリ（写真2）ですが、今回洞穴内で休眠中の個体が捕獲できました。洞窟に棲むコウモリで、耳介（私たちの耳に相当するところ）と耳珠（耳の内側にある突起物：写真2）が長いのが特徴です。尾膜（腿間膜）の縁に細毛があり、これを「のれん」に見立てて名前が付けられたようです。頭胴長が47～55mmの小型のコウモリです。近隣県ではまだ見つかっていないコウモリで、全国的にも確認されている生息場所は多くありません。



写真2 ノレンコウモリ

石川県のコウモリ相

石川県でコウモリが本格的に研究されたのは1979～1980年、当時金沢大学理学部生物学科の佐野明氏と、白山自然保護センターの上馬康生氏の白山でのコウモリ調査が最初です。この時の調査で2科7種のコウモリが確認され、それまでにわかっていた別の2種を加え石川県として2科9種のコウモリの生息が報告されました。

この後1984年に金沢市兼六園でヤマコウモリが見つかり、上馬氏と当時兼六園管理事務所の南他喜男氏が報告しています。1990年には筆者により石川県におけるコウモリ相の総説が書かれ、その中でクロホオヒゲコウモリ（写真3）とコテングコウモリの白山での生息確認と、石川県のコウモリ相は2科12種であることが報告されました。また1988年に輪島市舳倉島で、当時石川県野鳥園の竹田伸一氏がみつけたコウモリが、クビワコウモリであることがわかり、奈良教育大学の前田喜四雄氏らにより1992年に報告されています。さらに、1995年に上馬氏と三原ゆかり氏（白山自然保護センター）により白山でのヒナコウモリの生息が報告されました。以上で、2科14種のコウモリが石川県で記録されたこととなります。そして今回新たに2種が確認されたことで、石川県でのコウモリ相は2科16種となりました（表）。

生息が予想されるコウモリ

近隣県である岐阜県のコウモリ相は2科16種、福井県のコウモリ相は2科8種です。近隣県で確認されていて、石川県で確認されていないコウモリは、岐阜県で確認されているチチブコウモリだけです。岐阜県では、洞穴内で休息中の個体が確認されています。今後の調査で、石川県でも生息が確認されるかもしれません。

さらに、近年国内での生息が確認され、全国的に徐々に生息場所の報告が増えてきているオヒキコウモリが石川県でも確認される可能性があります。

表 本調査及び近隣県での確認されたコウモリ類

種名 絶滅危惧分類	中宮温泉周辺 調査資料	深瀬周辺 調査資料	市ノ瀬周辺 調査資料	石川県	岐阜県	福井県
キクガシラコウモリ						
コキクガシラコウモリ						
ヤマコウモリ 絶滅危惧 類						
ヒナコウモリ 絶滅危惧 類						
クビワコウモリ 絶滅危惧 B類						
モリアブラコウモリ 絶滅危惧 B類						
アブラコウモリ						
テングコウモリ 絶滅危惧 類						
コテングコウモリ 絶滅危惧 類						
ウサギコウモリ 絶滅危惧 類						
モモジロコウモリ						
カグヤコウモリ 絶滅危惧 類						
ヒメホオヒゲコウモリ 絶滅危惧 B類						
クロホオヒゲコウモリ 絶滅危惧 B類						
ノレンコウモリ 絶滅危惧 B類						
ユビナガコウモリ						
チチブコウモリ 絶滅危惧 類						

環境省(2002)のレッドデータブックの絶滅危惧分類を示した。

は、本調査で生息が確認されたコウモリ類を示した。

は、文献資料から生息が確認されたコウモリ類を示した。

は、各県での生息確認種を示した。



写真3 クロホオヒゲコウモリ

コウモリ相から見た石川県の自然

今回の調査で、石川県に生息すると予想されるコウモリ類は、ほぼ全種が確認されてきたと思います。全国的にもこれだけ多くのコウモリ類の生息が確認されている県は、多くありません。

環境省のレッドデータブックに絶滅危惧種とされている多くのコウモリは、原生林かそれに近い自然林を必要としています。つまり、それらのコウモリが生活をしていくためには、ねぐらとして木に出来た穴（樹洞）がたくさん必要なのです。これはコウモリの種ごとや雄・雌で分かれて棲むだけでなく、季節ごとにねぐらの樹洞を変えるため、たくさんの樹洞が必要なのです。このような樹洞を木が持つようになるには、数十年以上を必要とします。さらに、石川県に生息するコウモリはすべて昆虫を餌としています。これらのコウモリは一晩に自分の体重の $1/5 \sim 1/3$ （ $2g \sim 5g$ 以上）の昆虫を食べています。それも昆虫の羽は食べないので個体数にすれば、一晩に1頭のコウモリが200匹～300匹以上の昆虫を食べている計算になります。これが冬眠期（11月下旬頃～3月上旬頃）を除く毎日（約250日）行われているのです。白山地域に多くいると予想されるカグヤコウモリが、例えば300頭が生息しているとして（実際はもっといると予想されますが）、単純に計算すると1年間に2,250万匹以上（昆虫300匹×250日×コウモリ300頭＝昆虫2,250万匹）の昆虫を必要とするのです。これだけの昆虫を年間平均して供給できる森というのは、原生林かそれに近い森しかないのです。

以上からも、石川県にいかに優れた自然（森）が今も残されており、それを示す良い指標としてコウモリが使えることが理解してもらえらるかと思います。この意味でも、今後これらのコウモリ類が、どのように石川県内で分布しているのか、どの程度いるのか、今後も生息していけるような状況であるのか等々の継続した調査が必要になってきていると思います。

（岐阜県立八百津高等学校）

ニホンザルをどう思っているか

- 石川県の白山麓と都市部との比較 -

原田 正子

現在、ニホンザル（以下、サルとします）による農林業被害（以下、サル被害とします）は日本各地で発生しており、石川県では白山麓の農村を中心に多発しています。白山麓では1980年頃からサル被害が発生するようになり、1983年には群れによる被害が初めて確認され、その後年々手取川下流域へと拡大しています。被害の発生を受けて、1983年から毎年サルの有害駆除申請が出され、1998年までは追い払いを主にしてきましたが、被害が増え広域化してきたため、1999年から捕殺するようになりました。

一方、環境省は1997年の鳥獣保護法改正で、野生動物を科学的・計画的に保護管理していくために、保護管理計画を都道府県で策定するように決めました。石川県では2001年にサルとクマについて「特定鳥獣保護管理計画」を策定し、2002年から実施しています。環境省が示したガイドラインでは、野生動物の保護管理計画の策定には個体群レベルでの生態学的な知識に加え、専門家と地域住民の計画に対する幅広い合意が不可欠であるとしています。

そこで2001年に白山麓の住民にアンケートを行ない、サルやサル被害に対する意識を明らかにし、これらの意識がどのように関わっているのかを検討しました。さらに幅広い住民の意識を把握するため、白山麓周辺の都市住民にも同様のアンケートを行ない、比較を試みました。今回はその結果の一部を紹介します。

調査地域とアンケート内容

白山麓で調査対象としたのは、鶴来町、河内村、鳥越村、吉野谷村、尾口村、白峰村です。このうち、現在被害が頻発しているのは河内村、鳥越村、吉野谷村、尾口村（被害村とします）で、被害のほとんどないのは鶴来町と白峰村（無被害町村とします）です。また、白山麓周辺に位置する金沢市、小松市、松任市などを都市としました。

アンケート項目は、サルに対する意識、サル被害に対する認識と意識、サル被害対策についての意識などです。都市住民に対するアンケートは2001年10月20日・21日に金沢市において開催された「農林漁業祭り」に会場し

問1 サルは好きですか	被害村	無被害町村	都市
	(n=209)	(n=63)	(n=195)
好き	4%	8%	42%
嫌い	55%	30%	12%
どちらでもない	39%	60%	46%

問2 野生のサルを見てどう思いましたか	被害村	無被害町村	都市
	(n=209)	(n=63)	(n=195)
複数回答可			
かわいい	13%	10%	30%
おもしろい	6%	10%	19%
こわい	36%	25%	14%
憎らしい	60%	11%	5%
何とも思わない	10%	13%	11%
その他	5%	5%	5%
無回答	3%	11%	2%

問3 あなたのお住まいの市町村にサルはいますか	被害村	無被害町村	都市
	(n=209)	(n=63)	(n=195)
いる	98%	38%	19%
いない	1%	33%	67%
わからない	0%	29%	11%

問4 実際にサルを見たことはありますか	被害村	無被害町村	都市
	(n=209)	(n=63)	(n=195)
見たことがある	100%	81%	72%
見たことがない	0%	19%	28%

問5（見たことのある人のうち野生のサルを見た場所はどこですか	被害村	無被害町村	都市
	(n=209)	(n=63)	(n=195)
複数回答可			
白山スーパー林道	26%	29%	29%
白山麓村内	90%	33%	24%
金沢市内	2%	0%	5%
加賀市内	2%	0%	4%
その他	5%	32%	9%
県外	7%	6%	28%
無回答	2%	22%	1%



被害にあったカボチャ
(吉野谷村 ゴマンド)

た人に対して行いました。配布数は306部で、そのうち「都市」として選択された195部を分析に用いました。また白山麓住民に対するアンケートは2001年11月に実施し、各町村役場の協力を得て310部を配布し244部(78.7%)を回収することができました。

白山麓と都市をくらべてみると

都市では「サルは好き」、野生のサルを見たときに「かわいい、おもしろいと思う」など、ニホンザルを好意的にとらえているのに対して、白山麓では「サルは嫌い」、野生のサルを見たときに「憎らしい、こわいと思う」と否定的にとらえている人が多くいました(問1、問2)。

「住んでいる市町村にサルはいると思いますか」という質問に対しては、都市では多くの人が「いない」、白山麓では「いる」と回答しました(問3)。また、野生のサルを目撃した経験を持つ人は都市、白山麓ともに多かったのですが、目撃場所に差がありました。都市では「白山スーパー林道」「県外」といった日常生活の場所から離れたところを挙げていたのに対し、白山麓では「村内」「白山スーパー林道」といった日常の場、あるいはそれに近い場所が多く挙げられました。このことから、ニホンザルとの接触は都市ではあまりなく、白山麓では頻繁であることがわかります(問4、問5)。

サル被害に対して、都市では「生きるために食べるのだから仕方がない」と答えた

問6 サル被害に対する意識

	被害村	無被害町村	都市
	(n=209)	(n=63)	(n=195)
絶対に許せない	75%	41%	19%
生きるために食べるのだから仕方がない	13%	29%	51%
大した問題ではない	0%	0%	2%
関心がない	0%	3%	0%
わからない	1%	14%	9%
その他	4%	10%	9%
無回答	7%	3%	10%

問7 サル被害を防ぐ方法として次のどれがいいと思いますか

	被害村	無被害町村	都市
	(n=209)	(n=63)	(n=195)
複数回答可			
駆除する	77%	33%	31%
防除柵やネットで田畑を囲む	38%	38%	38%
サルが食べない作物を作る	7%	2%	5%
花火や爆竹機でサルを追い払う	26%	17%	16%
山をサルにとって好ましい環境に変える	23%	54%	62%
被害の出にくい場所に農地を集める	4%	2%	12%
被害の深刻な農地は放棄する	7%	0%	1%
特に何もなし	0%	2%	1%
わからない	0%	10%	3%
その他	2%	2%	4%
無回答	0%	0%	1%

問8 問7で「駆除する」を選んだ理由は何ですか

	被害村	無被害町村	都市
	(n=160)	(n=21)	(n=61)
複数回答可			
サルはいなくてもいい	34%	29%	14%
農作物に被害を出すなら仕方がない	68%	71%	64%
一番効果がある	44%	24%	34%
わからない	2%	0%	5%
その他	3%	10%	5%
無回答	0%	0%	5%

問9 サル被害に対して行政がすべきと思うのはどれですか

	被害村	無被害町村	都市
	(n=209)	(n=63)	(n=195)
複数回答可			
駆除を実施する	73%	30%	25%
被害対策へ補助金を出す	40%	57%	57%
被害の補償をする	22%	14%	17%
被害対策の講習会を行なう	17%	27%	27%
特になし	1%	2%	2%
わからない	5%	11%	11%
その他	2%	3%	4%
無回答	0%	0%	8%

人が多かったのに対し、白山麓では「絶対に許せない」と答えた人が多く、都市より厳しくとらえている人が多くいました（問6）。またサル被害に対し適切だと思う防除方法についての質問では、都市では「山をサルにとって好ましい環境に変える」との回答が多かったのに対し、白山麓では「駆除する」が多くありました（問7、問8）。サル被害に対して行政がすべきだと思うことは、都市では「被害対策へ補助金を出す」が最も多かったのに対して、白山麓では「駆除の実施をする」と答えた人が多いという結果になりました（問9）。つまり、都市ではサル被害に対して穏やかな対策を望むのに対し、白山麓では厳しい対策を望んでいると言えます。

白山麓の各町村をくらべてみると

白山麓の町村間でも違いが見受けられました。まず、サル被害がほとんどない鶴来町と白峰村（無被害町村）の回答結果は、他の4村（被害村）とくらべると都市と似た傾向が見られました。また4被害村の間では、吉野谷村が他と違う結果がいくつかありました。つまり、他の3村で「サルは嫌い」が最も多かったのに対し、吉野谷村では「サルは好きでも嫌いでもない」が最も多かったこと（問10）。サル被害に関して、4村とも「絶対に許せない」が1位を占めたことには変わりはありませんが、吉野谷村はその割合が4村の中では最も低く、また「サルも生きるためだから仕方がない」という回答の割合が他の3村とくらべ最も高かったことが挙げられます（問11）。今後の農作物栽培について、吉野谷村は「自分の代でやめる」と答えた人の割合が他の3村より低かったこと、またサル被害対策を行っている人が他の3村より少なく、サル被害対策をしていない理由に「自分だけやっても他で被害が出るから」と答えた人が多かったことなどです（問12）。これらのことから、吉野谷村の人々はサル被害に慣れてしまった、あるいはあきらめている状態であると考えられることができます。

サルに対する意識の変化

白山麓でもめったにサルが目撃されず、サル被害のなかった1970年代に行われた聞き取り調査の結果によると、当時の白山麓の人はサルに対して好意的で、人と対立する存在としてとらえていなかったとあります。今回のアンケートの結果では、サルと日常的にほとんど関わりを持たない都市の人はサル被害に対して厳しくなく、被害防除方法についても穏やかな対策を望んでいました。一方、サルが日常的にみられ、しかも農作物に対し被害を被っている白山麓の人々は、サルやその被害防

問10 サルは好きですか（被害村間の比較）	被害村間の比較				問12 現在被害対策を行っていない理由（被害村間の比較）	被害村間の比較			
	河内村 (n=40)	鳥越村 (n=85)	吉野谷村 (n=44)	尾口村 (n=40)		河内村 (n=14)	鳥越村 (n=27)	吉野谷村 (n=16)	尾口村 (n=9)
好き	0%	4%	11%	3%	複数回答可				
嫌い	75%	51%	36%	63%	お金がかかる	21%	22%	19%	33%
どちらでもない	25%	41%	52%	33%	時間がかかる	21%	7%	6%	22%
					人手がない	14%	11%	6%	33%
					やり方がわからない	14%	11%	13%	0%
					諦めている	14%	22%	31%	78%
問11 サル被害に対する意識（被害村間の比較）	被害村間の比較				自分だけやっても他で被害が起こる	36%	22%	38%	11%
	河内村 (n=40)	鳥越村 (n=85)	吉野谷村 (n=44)	尾口村 (n=40)	そんなに深刻な被害ではない	14%	41%	6%	11%
絶対に許せない	78%	79%	61%	78%	もうすぐ農業をやめる	7%	0%	6%	0%
生きるために食べるのだから仕方がない	5%	13%	27%	5%	特に理由はない	7%	4%	19%	11%
大した問題ではない	0%	1%	0%	0%	その他	21%	7%	0%	0%
関心がない	0%	0%	0%	0%					
わからない	0%	1%	5%	0%					
その他	8%	1%	2%	8%					
無回答	10%	5%	5%	10%					

除に関してとても厳しい意見を持っていました。

今回の調査では、白山麓では多くの方が被害対策に「駆除」を望んでいましたが、その選択理由で最も多かったのは「被害を出すのなら仕方がない」でした（問8）。これは利害関係のある白山麓住民も必ずしも積極的に駆除を進めたいと思っているわけではないことの表れだと言えます。都市の人と白山麓の人のサルや被害に対する意識は、一見



畑を網で囲った被害対策（鳥越村 神子清水）

結果でした。しかし、実はその違いは固定されたものではなく、被害の程度の違いによって意識が左右される、ということが明らかになりました。また、サル被害が頻発している4村のうち、特に吉野谷村がサル被害に対して馴れやあきらめの傾向がみられるのは、理由の一つとして、被害発生時期が最も早く、今ではほぼ全村が被害地であることが考えられます。吉野谷村では19年前から、尾口村は17年前から被害が発生しましたが、全村に広がったのは吉野谷村の方が早く、尾口村では10年ほど前から、鳥越村が5年前から、河内村では3年前からと報告されています。被害を受けている状態が長く続くと、被害に対する意識だけではなく、被害対策や野菜作りそのものへの意欲を減退させるようです。以上のことから、サルに対する意識や被害対策に対する考え方は、サル被害の程度とサルとの接触の度合いが大きく影響し、さらに行政への要望にも影響していると考えられます。このことは同じ白山麓の村でも、サル被害がほとんどない鶴来町と白峰村の回答結果が都市の回答結果と似ていたことから裏付けられます。つまり、サルを「害がなければ悪ではない」という論理でとらえていると言えます。

ま と め

一般に、野生動物の価値を評価する場合、野生動物が地域の生態系を構成している一員であること、また地域住民だけのものではなく国民共有の財産であることも視野に入れる必要があります。このような観点から行政機関は野生動物による被害対策を考える場合、被害発生地域の住民意識や感情だけを「民意」とするのではなく、できるだけ広範囲の人々の意見を求める必要があります。それは、今回のアンケート結果から得られた被害地の住民の感情や意見が、被害者としての一時的、表面的な感情から生まれた意見の表れであり、感情や意識が時間の経過とともに変化するものであることから理解できます。またサルに対して住民が持っている「害がなければ悪ではない」という考え方を踏まえて判断することも重要だと思います。サルがいることが問題なのではなく、サルによる被害があることが問題となっているのです。今、白山麓の住民が求めているのは、「サルがいても被害のない白山麓」であるといえます。

最後に、お忙しい中アンケートに回答してくださった方々、配布と回収に協力してくださった県庁や町村役場の方々には大変お世話になりました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

室堂の移り変わり

上馬 康生

前回のはくさん（第30巻第2号）には、新しくなった白山の室堂のことが紹介してあります。室堂センターの内部が全面新しくなりましたが、構造的には以前の建物の鉄骨骨組みを利用して増築されています。以前の建物ができしたのは今から36年前の昭和42年です。ではそれ以前の室堂がどうなっていたのか、それを知っている方はあまり多くないのではないかと思います。そこで今回は室堂の移り変わりについてお話しします。

白山信仰の時代

古くは今の石川県、福井県、岐阜県から3つの道（加賀禅定道、越前禅定道、美濃禅定道）が白山の山頂を目指して、その途中に宿泊のための建物がありました。例えば加賀禅定道の天池室（加賀室）跡や美濃禅定道の別山室跡、六兵衛室跡など、現在でも石垣が残っており、それとわかる場所があります。室堂は越前禅定道のコース途上にあたり、越前室があったところとされています。天保4年（1833年）高田保浄著「続白山紀行」には次のように書かれています。『御前室 大御前の正面成故御前室といふ、越前室共いふ、横二間長さ七間中に泰澄の像有、白山紀行に、住古は八の室有と云、今も太師堂・護摩堂有、平泉寺之僧毎夏参籠すとあれ共、今は太師堂も護摩堂もなく、参籠之僧もなし、六月土用之始より二百廿日比迄室番二人居る』。すなわち江戸時代末期には、今の室堂の辺りに御前室またの名を越前室という、横約3.6m長さ約12.7mの建物が1つありましたが、それより前には太師堂と護摩堂があった時や、さらに以前には8つの建物があった時もあるということがわかります。



写真1 明治末期の室堂と御前峰



写真2 大正末期の室堂と御前峰

明治から昭和初期

さて室堂の写真の古いものとして、明治末期ころに撮影された写真が見つかりました。おそらく室堂か山麓の白山温泉で売られていた絵八ガキで、明治44年8月5日登山記念と読めるスタンプが押されています。そこには室堂が1棟だけ写っており、木造であることがわかります。背景の御前峰との関係から判断してほぼ現在の位置にあり、別の資料によると間口7間（約12.7m）、奥行き2.5間（約4.5m）の大きさの建物でした（写真1）。その大きさからして、前記江戸時代末期と同じ建物を使っていたのかも知れません。

大正10年（1921年）に、それまで木造であった室堂が石積みに改造され、翌大正11年に石川県により大室と小室が増築されて収容人数が増えました。大正15年の室堂宿泊者数は2,305人となっています（図1）。次に写真2には大小2つの建物がみえ、ともに石積みです。この絵八ガキは当時の白

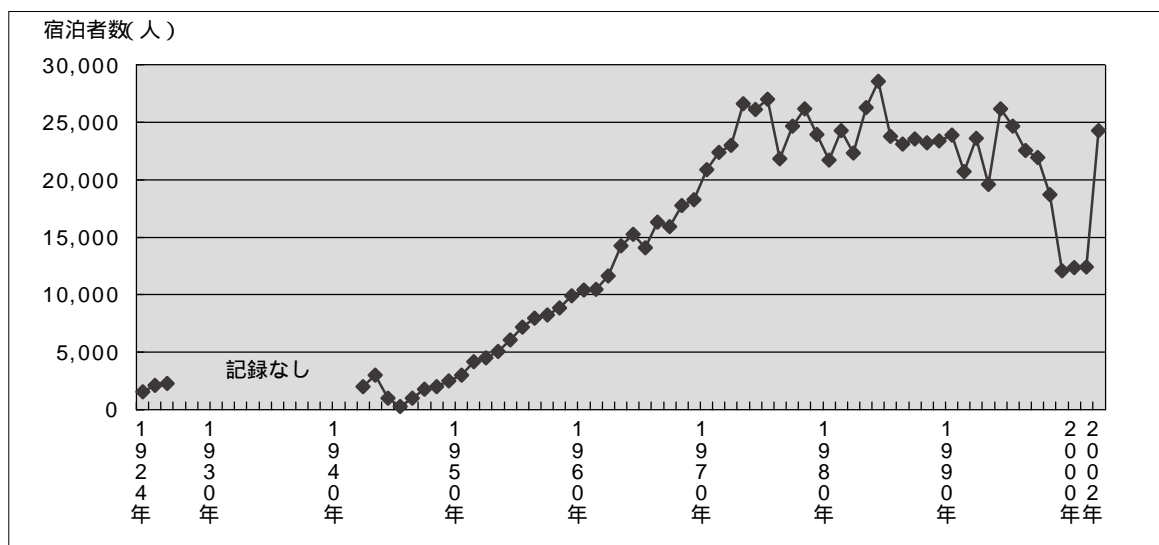


図1 室堂宿泊者数の変化

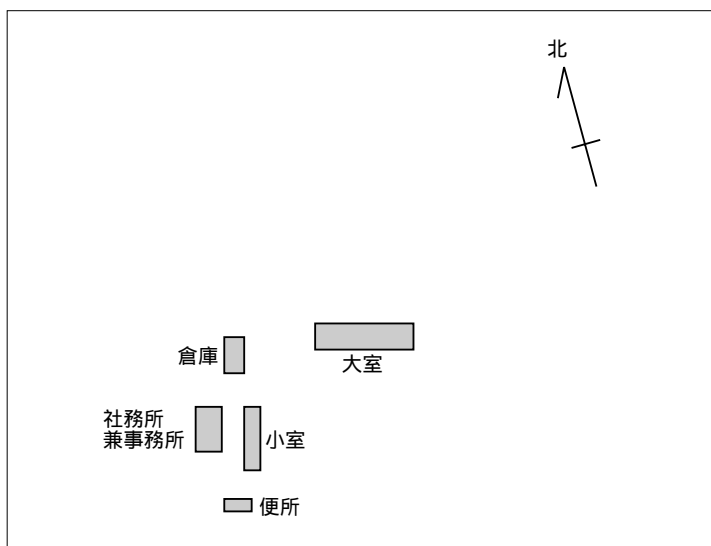


図2 昭和6年当時の室堂施設配置略図

れいに切られているのがわかります。写真2の方がより広い範囲が切られています。古文書によると、ずっと昔からハイマツなどを切って室堂で燃料にしていたのです。次に昭和6年（1931年）の時点では、この他に社務所兼事務所、倉庫、便所があり（図2）、昭和7年には婦人室が建築されています（これらの建物は全て現在はありません）。

山温泉山田屋旅館発行となっており、同じシリーズの別の絵八ガキにその山田屋旅館の別館が写っていて、その建設は大正15年（昭和元年）ころであるのがわかっています。すなわちこの写真は、大正11年～同15年の間のものと考えられます。なお、山田屋旅館を含め付近にあった当時の白山温泉などの建物は、昭和9年の大水害ですべて土石流に埋まってしまい現在はありません。

ちなみに写真1、2ともに室堂から御前峰へ上がる道の横の斜面が、きれいに切られているのがわかります。

昭和20年代から昭和40年代

室堂の年間宿泊者数は、大正時代から昭和20年代前半までは多くても3,000人まででしたが、その後、少しずつ増加していきます（図1）。施設としては、昭和23年に雷鳥荘（現在はありません）が新設され、同年から利用者の便宜を図るため白峰郵便局白山頂上臨時出張所（現白山山頂郵便局）が、また昭和28年から金沢大学医学部学生有志らによる白山診療班（現白山室堂診療所）が開設されました。写真3はそのころの室堂です。昭和31年に白山荘（前白山荘）が新築され、施設も増えていき

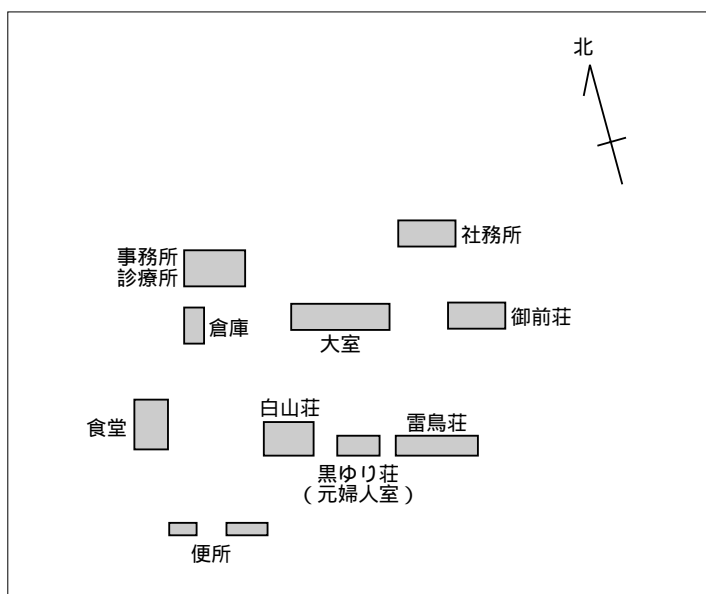


図3 昭和32年当時の室堂施設配置略図

ます（図3）。室堂宿泊者数は、国定公園に指定された昭和30年（1955年）には7,200人、国立公園指定の昭和37年には11,635人、その翌年には14,103人と急増しています（図1）。

国立公園となったことで、新たな整備方針により、古い施設を取り壊し新しい施設が建設されることになりました。昭和40年に室堂平園地（現在の室堂周辺の遊歩道など）が、昭和42年に室堂センター（前室堂センター）ができました（図4）。その時の配置図を見ると、しゃくなげ、こざくら（共に昭和38年に新設）、御前荘、診療所、事務所がありますが、これらの建物は昭和42年に現こざくら荘、43年に現くるゆり荘、44年に現御前荘の宿泊棟が建設され、なくなりました。その跡が今の室堂前の広場となっています。宿泊者数は少しずつ増加し、昭和39年に15,000人、昭和45年には20,000人を越えました。



写真3 昭和20年代の室堂（木下幸雄氏撮影）

昭和50年代から現在

残雪に頼るところの多い室堂の水は、毎年8月になると不足しました。水不足を補うため、昭和50年代初めに貯水プールや地下貯水タンクが設けられ（図5）、その後地下水槽が造られました。今でも8月にはよく水不足となります。写真4は昭和53年の室堂全景です。参籠殿（昭和54年竣工）ができる前の祈祷殿・社務所および前の白山荘が写っています。前白山荘は昭和59年に建て替えられて現在の白山荘となりました。次いで昭和60年に宿泊棟の東側に屋外トイレができています。その後しばらくは室堂の建物に大きな変化はありません。

今回、平成11年（1999年）から3年間、環境庁（環境省）と石川県による白山緑のダイヤモンド計画事業の一つとして、新しい室堂が建設されました（写真5）。室堂センターは前の建物の骨組みを利用して全面改装し、レクチャーホールと食堂のスペースが新たに広くなりました（図6）。その他に新しくなったのは前号

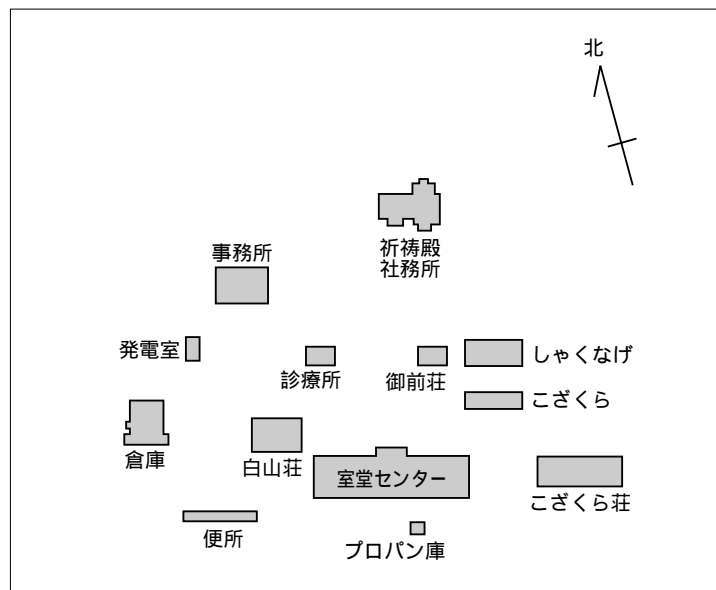


図4 昭和42年当時の室堂施設配置略図

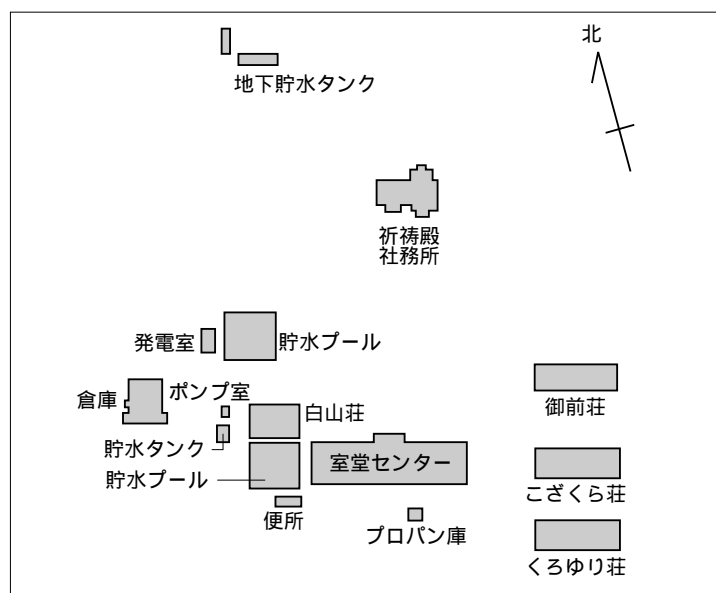


図5 昭和52年当時の室堂施設配置略図



写真4 昭和53年の室堂と別山



写真5 平成14年の室堂

で紹介したとおりです。工事期間中減少していた宿泊者数は平成14年には24,288人と元のレベルとなり、にぎわいを取り戻しました（図1）。

本稿を書くにあたり、「財団法人白山観光協会創立50周年記念誌」を参考にさせていただきました。昔の絵八ガキは織田日出夫さんからお借りしました。昭和20年代の写真は木下幸雄さん撮影のもので、また古文書については梅 典雅さんにお世話になりました。それぞれ貴重な資料をありがとうございました。

（白山自然保護センター）

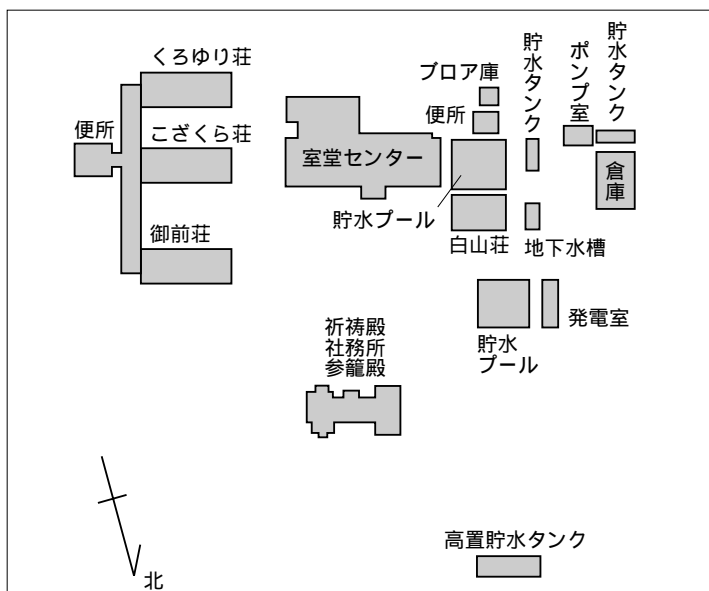


図6 平成14年の室堂施設配置略図



ブナオ山

みずのとひつじ
癸 羊の新年おめでとうございます。

昨年は10月下旬のドカ雪で、白山スーパー林道は通行止めとなり、中宮展示館も11月はほとんど開館できず皆様にご迷惑をかけました。しかし、ブナオ山観察舎の方は11月20日より、久しぶりに積雪の中の開館となりました。ブナオ山斜面に生えているススキなどの背の高い草が雪のおかげで倒れており、カモシカもよく見え、開館当初から動物観察にはもってこいのシーズン入りでした。

先日、よく晴れた朝は気温 - 8 の寒さでした。観察舎からみえる湯谷頭やブナオ山の樹氷の輝きが素晴らしく、その下でカモシカやサルの群れが見られました。観察舎の近くに現れたアオゲラはヤマウルシの細い枝にぶら下がって残った実を食べ、リスも近くの林の中から顔をのぞかせてくれました。やがて1羽のクマタカの飛翔が山麓の楽園を閉じていきました。

今年も観察舎では、希望者があれば随時ミニ観察会を開いています。カンジキをはいて雪の中を少し歩いてみませんか。植物の冬越しに出合ったり、動物の生活の一端をみつけたりできますよ。

(田中 稔)



リス



アオゲラ

センターの動き（11月1日～1月31日）

- | | | | |
|--------|---|-------|------------------------------------|
| 11. 3 | 中宮展示館閉館（積雪通行止めのため） | 12. 8 | 白山自然ガイドボランティア活動報告会
（白山国立公園センター） |
| 11. 4 | 野生動物保護学会発表（宇都宮大学） | 12. 8 | 県民白山講座「知られざる動物」
（白山国立公園センター） |
| 11. 5 | 市ノ瀬ビジターセンター閉館 | 12.12 | 白山まるごと体験村運営協議会
（白峰村役場） |
| 11.10 | 白山まるごと体験教室
「自然素材をアートしよう」
（白山国立公園センター） | 12.19 | 天然記念物カモシカ調査会議
（県教育委員会） |
| 11.20 | ブナオ山観察舎閉館 | | |
| 12.5～6 | 全国自然系調査研究機関連絡会議（札幌市） | | |

編集後記

コウモリのことを書いていただいた山本さんは、金沢大学の学生だった頃から石川県内の調査をされ、現在はコウモリの会とクビワコウモリを守る会の会長もされています。また原田さんには、東京農工大学の大学院生として白山で研究してこられたテーマについて書いていただきました。

初め暖冬との予想が気象庁から出ていた今年の冬ですが、1月に入ってから平年並みと修正されました。1月30日現在、白山自然保護センターのある吉野谷村木滑（標高300m）で積雪130cm、また尾口村一里野の当センターブナオ山観察舎（標高600m）で積雪220cmです。

今のところ山の自然も人の暮らしも特に変わったこともなく推移しています。ブナオ山観察舎からはカモシカやサル、イヌワシやクマタカなど、他ではみられない白山の冬ならではの自然の営みが眺められます。インターネットでも、その一端を垣間見ることはできますが（<http://www.sizenken.biodic.go.jp>）、やはり現地で見ると生きた自然は迫力が違います。山の空気を通して伝わってくる、生きものたちの強い生命力を感じることができます。たいていの方は、カモシカなど見られたら、30分から1時間もあれば満足して帰られますが、通の人は完全装備（防寒対策）で来られ、半日から1日と長く過ごされます。雪のある間に一度訪ねてみてください。（上馬）

目次

表紙 獅子吼高原のスカイスports	野崎 英吉 ...1
白山で新記録のコウモリ2種	山本 輝正 ...2
ニホンザルをどう思っているか 石川県の白山麓と都市部との比較	原田 正子 ...6
室堂の移り変わり	上馬 康生 ...10
施設だより ブナオ山観察舎	田中 稔 ...15

はくさん 第30巻 第3号（通巻125号）

発行日 2003年1月31日（年4回発行）
編集発行 石川県白山自然保護センター
920-2326 石川県石川郡吉野谷村木滑又4
TEL0761-95-5321 FAX0761-95-5323
URL <http://www.pref.ishikawa.jp/recr/hakusan/haku.html>
E-mail hakusan@pref.ishikawa.jp
印刷所 株式会社 橋本確文堂